

スユランにおけるパウロ

—— 迸る霊のことば ——

渡辺 優

聖パウロ。

しかし最も心奪われる者は、／いと力強きかの使徒であつた。／人がそのすべてを崇敬する／数々の偉業に溢れる神
的なるパウロ、／神の愛に傷つき、多くの苦悩に打ちひしがれ／悲惨のなかにあつて幸多き彼は、／全地を揺るがし
／熱き霊を吹き込んだ。／神よ、神よ、神よ、われらには
ただひとつの神がいる、／ゴルゴタの丘で死せる神が。

—— ジャン＝ジョゼフ・スユラン『神の愛の賛歌』第一
の歌「愛に酔える聖人たち」より⁽¹⁾

はじめに——スユランに息吹くパウロのことば

筆者はすでに、本稿の「序説」として著した別の論考において、宮本久雄のパウロ神秘論⁽²⁾、とりわけその「ソーマ的受難と変容の神秘論」を継承展開するかたちで、パウロと一七世紀フランスの神秘家スユランの結びつきに光を当てた。そこではまず、「ルーダンの悪魔憑き」事件以後のスユランに認められる「ソーマ的変容」が、まさしく「はらわたにつきささったあなたのことばを身に帯び」（『告白』第九卷二章3節）つつ生きる、パウロ＝アウグスティヌス的神秘論の系譜に位置づけられることを示した。さらに、

スユランにおけるソーマ的変容は、本質的にことばによる——ことばの中での、ことばを通じての——経験として捉えられるべきことを明らかにした⁽³⁾。

本稿では、パウロとスユランのことばが共鳴するさまを、後者のテクストに沈潜しながら、より鮮明に描き出すことをねらう。聖霊の、身体のあるいは「女性」のことばでもあるようなスユランのことばが、根本的なところでパウロのことばに支えられ、導かれていたということを示すことになるだろう。中世から近代への転換期に特有の緊張感に深く浸されてもいたこの神秘家のことばに固有のダイナミスムは、使徒パウロのことばなしにはなかった。以下、パウロのことばがスユランのテクストのどこにどのように引かれ、どのように息吹いているかをみていこう。

1. 語りえぬものを語ることは

おのれの身に被った経験を語ろうとして、しかし、おのれの言葉によってはついにそれを「それ」として語りえぬことを訴え、あるいは嘆いてみせるとは、それ自体、神秘家の常套句ともいえる「語りかた」である。言語活動と経

験の緊張関係は、キリスト教靈性史上にも、おそらく近世神秘主義において、なかでもスユランにおいてひとつの頂点に達した。しかしながら、スユランは「語りえぬもの」を前に語ることをやめることはけっしてなかった。

ニコラス・ペイジが示したように、スユランにおいて神秘的経験の「不可言性」は、思弁的言語活動の失効として捉えることができる。言い換えれば、スユランにおける「語りえぬ経験」は、分類し、分析し、推論する思弁的知性の機能不全として鮮明化する。この事態が最もよくみとれるのは、『経験の学知』第三部第一三章の次の箇所である。

以上すべてのことが魂に到来するのは、イエス・キリストとの合一を通じてであるということを知らしめたと思う。イエス・キリストとの合一こそ、魂にやってくる善・財の一切の源泉であり、かくして魂が自らの裡にイエス・キリストを感じているあいだ、魂には四つないし五つの効果が生じるのが普通である。第一、の効果は、天上の事どもへの魂の上昇であり、来世に約束されている善・財の恒常的な魂への刻印であって、

現世蔑視をとまなう。第二の効果は、活動し、目の前
にある一切を引き受ける活力であり力強さである。魂
が、先に述べたようなやりかたで、自らの裡にこの効
果を感じているあいだ、魂はいわば持続的な栄光の感
覚をもつのだが、その結果、神父の身を襲ったような
衰弱、時に極度の衰弱のなかにあっても、倒れこんで
しまうことはなく、その威光によって魂をまったく圧
倒するようなくつかの事どもが魂の内に迸っていた。
というのもそれは、内なる霊の激発のようであり、す
べての感覚を栄光の状態にあるかのようにしていたの
だから。このことは三度ないし四度起こった。それは
とりわけ、魂が最も大いなる衰弱に陥っていたときの
ことであり、そのとき魂は記述しえない善・財に取り
巻かれていた。今でもなお、私はこれらの善・財を説
明することができない。それらを表現することはそれ
ほど難しいのだ。(S. III, 13, 347-348. 傍点強調部は引用
者)

スユランは、自らの経験を読者に「知らしめる(理解さ
せる)」ため、逸話的・物語的記述からいったん離れ、む

しろスコラ学的な、インパーソナルな一般論的記述によつ
て経験の諸特徴(四つないし五つの効果)を分析的に数え
上げていこうとする。ところが、「第二の効果」を記述し
ている途中、自らの魂を襲った個別的具体的経験がフォ
カスされるや、パーソナルな物語的記述が回帰し、当初企
図されていたはずの分析的な記述は跡形もなく消えてしま
う。「スユランは書こうとするが、彼はただ、書くことが
破綻する地点に至りつくのみなのだ⁽⁴⁾」というページの指摘
は正鵠を射ている。

だが、もう一步踏み込んで考える余地がある。それは、
スコラ学的言語活動の破綻をもたらした経験が、「内なる
霊の激発」として語られていることである。ここに認めら
れるのは、ひとつの語りかたの破綻ではあっても、語りそ
のものの破綻ではない。ここには、別様のことは、すなわ
ち聖霊によって語る身体のことばが垣間見える。そしてそ
れは「語りかた」ないし「スタイル」の変容というかたち
で語られている。スユランにおけるソーマ的変容の経験は、
ことば(文体)の変容の経験でもある⁽⁵⁾。

合わせてもう一点確認しておきたい。それは、スユラン
のことはと規範ないし伝統との関係である。スユラン、あ

るいは神秘主義全般については、しばしば伝統からの逸脱的性格が強調される。⁽⁶⁾しかし、両者の関係は錯綜しており、かつして一義的な把握を許さない。

少なくとも二つの事柄に留意したい。第一に、晩年のスユランが、他の人びとと同じ「通常・平凡な信仰」へと帰着し、そこにこそ溢れる神祕的な豊かさ、神の愛の充溢を語ったこと。ルーダンの悪魔憑き事件に発する数々の「超常の・常軌を逸した体験」をその身に被り、こと細やかに書き綴ったことによって、後世のスユラン像には「逸脱」のイメージがつけまわることとなった。しかし、スユランという神秘家のことばは、他の信仰者たちと共通の生の地平の上でなされたやりとりのなかから生まれたことばであった。⁽⁷⁾

そうしたスユランのことばが、伝統的・規範的な教説、あるいはスコラ学的推論のことばに則った語りかたからしばしば「逸脱」するというのは確かだ。しかし、それはどのような逸脱なのか。逸脱のしかたが問題だろう。これが第二の留意点である。先んじて言えば、規範的な語りかたからの「逸脱」の局面において、スユランはしばしば身体をして語らしめる。ところで、スユランにおいてこの「身

体のことば」は、すなわち「聖霊のことば」であり、それが語られるときには度々パウロのことばが引かれる。スユランのことばは、パウロという「権威」のことばに拠つていた。⁽⁸⁾筆者はここに、宮本久雄のいうキリスト教ソーマ的神秘論の伝統のあらわれをみる。そして、伝統とのこのような結びつきを、鶴岡賀雄のいう「根源への逸脱」⁽⁹⁾として捉えてみたいと考えている。

以下、『霊のカテキズム』の一節の検討を通じて、掘り下げるべき論点の所在を明確にしよう。ここでスユランが述べるところによれば、神によってもたらされる認識と、神学や自然哲学による認識とのあいだには、「自然の事象をめぐって子ども**の**認識と自然哲学者のそれとのあいだに認められるほどのわずかな釣り合いもない」(OSV, IV, 387-388)。神**的**認識と人間**的**認識のあいだには、いかなる共通の尺度も容れない、絶対的な断絶がある。これについて彼は次のように問い、答えてみせる。

問い どうしてあなたが言うようなことになるのか。
というのも、神によってもたらされる認識を得た人びとが、それら神秘を語る際に、けつして常軌を逸した

言葉遣いをしなかったり、あまりにも新奇な事柄、つまりそうした神秘の光に適うような事柄は一切語らなかつたりすることが知られているのだから。

答え それは、彼らの知解にかくも多くの認識を与える神秘の感覚には、それを語るに相応しい言葉がまつたくないからである。ちょうど、インド諸島から来た人が、かの国のさまざまな果実を味わったことがあり、たとえそれについてきわめて完全な認識を得ているとしても、それぞれの果実の味の違いを説明することがけつしてできないように。なぜなら、そのような事柄を語るに適した言葉が皆無だからである。この国でも、マスカットとアプリコットとメロンのあいだにある違いを誰か他に説明しようとする人はきつと苦労するだろう。身ぶりや、何かしら感嘆を表す音の響きによるほかに、思考を説明する術がないのだ。……超自然の事どもにおいても同様である。超自然の事どもについて人が抱く感覚や認識は、実に多種多様な対象をもつので、それらを説明するにはどんな言葉も見当たらないほどなのだ。「人間には語ることが許されていない」(「ニコリ」一一四)。だからこそ聖テレサは、

彼女が経験した事どもについて語るときに、それを語る言葉の無力さに苛立っていたのだ。そうした言葉のうちには、彼女が言いたかつたことに見合ういかなるものもなかつたのである。(JCS, IV, 7, 388-389. 傍点強調部は引用者)

「常軌を逸した (extraordinaire)」 「新奇な (nouveau)」とは、一七世紀を通じて、主として神秘主義を批判する者たちによって神秘主義の「語りかた」に向けられた形容詞であつた。こうした神秘主義の言葉遣いをめぐる「百年戦争」⁽¹⁰⁾については、それ自体が近世神秘主義の輪郭を定める歴史的対象として、セルトーと彼に続く研究者たちによって考察が重ねられてきている⁽¹¹⁾。しかし、ここで引用するスユランのテクストは、そうした「語りかた」と区別されるべき、或る「身体の語りかた」の存在を垣間見せてはいないだろうか。

「問い」のなかでスユランが示唆しているように、神秘を語る(語ろうとする)言葉は、必ずしも特別な言葉遣いを伴うとはかぎらない。神秘を語ろうとすることは、神秘の圧倒的な豊かさの前に立ち尽くしてしまうがゆえ

に、かえって「普通のことば」であるほかない場合がある。「人間には語ることが許されていない」神祕を、だがそれでも語ろうとする神祕家の言葉の、これもまたひとつの可能性だろう。ここで想起したいのは、晩年のスユランが、あらゆる超常の体験を過去のものとし（したがってそれを語ることをやめ）、人びとと共通の信仰へと回帰した現在において、通常の信仰の内なる財・善を語り続けたことである。⁽¹²⁾しかし、それはなおどのような語りかたによってなされるのか。

考察の糸口となるのは、「身ぶりや、何かしら感嘆を表す音の響きによるほかに、思考を説明する術がない」事態への言及である。実に、スユランのテキストにおいては、語りだされることはが立ち尽くすところで身体が語り（歌い）だすという事態が、おそらくは自覚的に、繰り返し語られる。「またそのころ、聖体拝領の後……私はいつも説明し難いほどの大いなる慰めを得た。そして私はその場所にただ一人であつたので、歓喜の歌の数々を口ずさんで心を晴れやかにした。それら歌々は私を大いなる喜びと平安で満たしたのだつた」(S. II, 15, 267. Cf. S. III, 8, 312-313)。筆者はこれを、スユランの神祕主義を特徴づけるもうひとつ

の「語りかた」として、「身体のことば」または「霊のことば」として掬いあげたい。

自らの経験を語る言葉の無力さに苛立っていたテレサは、しかし「新しいことば (nuevas palabras)」を待望し続け、待望しながら語り続けることを通じて、それを到来させた。⁽¹³⁾スユランもまた彼女と同様の道を歩んだ。「新しいことば」は、しかし、すでに共通・通常の信仰のことばのなかにあるものとして再発見される。スユランにとって、パウロのことばは、そのように再発見されたことばであり、語りえぬものを別様の仕方ですることを可能にすることはであつたと思われる。

2. 「地の底」で語り続けることば

次に引用するのは、ジャンヌ・デ・ザンジュに宛てられたスユランの手紙の一部である。「ルーダンの悪魔憑き」事件の震源となり、スユランが悪魔祓いを担当したこの修道女との手紙のやりとりは、事件と事件に発するスユランの心身の危機が去った後も、一六六五年一月二九日に彼女が世を去る直前まで続いた。一六六二年五月七日のこの手

紙には、特別な超常の体験を離れ、信仰に生きる魂たちの内に流れる「神的な奔流」が語られている。注目したいのは、イメージ豊かに語りだされるスユランの詩的なことばの伸びやかさに加えて、その裏に張り付いている無力さへの自覚、あるいは言葉による伝達不可能性への自覚である。

次のように言わせてください。魂を大いに弱らせ、弱めする諸々の悲惨と衰弱にもかかわらず、神は神的な奔流を絶えず流れさせており、当の魂がおのれの欠陥と沈滞の重みに強く打ちのめされていると感じ、でも、神はその魂に絶えずこの瑞々しい水を飲ませ、魂を満たしているのだと。こうした水の流れが立てる音はその内部では実に大きいのですが、まことに秘められた流路を流れ続けているのです。……私はあなたにこの水流を語り、それがなんであるかを明らかにしようとして心掛けるのですが、にもかかわらず、それがまったくうまくいかないことを承知しています。私はまた、私たちの主イエス・キリストが、彼を通じて私たちにもたらされる善・財によって、それがどういったものなのか私たちには語る術もないままに、私たちを

満たし、渴きを癒すことを承知しています。(C. 1449, 1335, 傍点強調部は引用者)

かくしてスユランは、一方では、およそ狭義の神学の言葉には収まらない、自由で大胆な語りを繰り広げながら、他方では、自らが語ろうとする事柄の語り難さを実に率直に吐露する。しかしながら、彼は、それでもなお語り続ける。そうして紡ぎ出されるそのことばのなかに、パウロのことばは見いだされる。

この諸々の善・財の活動する流脈は、信仰の包括的な觀念の内にあり、神や神の子イエス・キリストについて一般的な事柄のほかには何か特別な富があるわけではなく、大多数のキリスト教徒の音域タフラチユアに合ったものです。そして私には、私たちの音域は根底において最もしがたない農民たちのそれと同じであって、私たちの主がそこに加える刺繍音プロドリは完全かつ単純素朴なものと思われまふ。ところで、私の考えでは、この流脈については、聖パウロがキリスト教徒たちの貧しさについて語っていることを語る、ことができます。キリスト

教徒たちのいと高き貧しさは、彼らの単純素朴さに認められる豊かさのうちに満ち溢れたのだと（「ニコリ」69―10）。いまや私たちの主は、主がその教会の子どもたちに与えるかの平凡さのうちに私をとらえており、私の魂は、ただたんに諸々の善・財を見いだすのみならず、神についての月並みでありふれた考えかたの、かの単純素朴さのうちに溢れる豊かさを見いだすのです。私の魂もそのなかにあつてよく調和がとれているのです。（C. 1449, 1335. 傍点強調部は引用者）

語り難きものの語り難さ、あるいはそれを語ろうとする自らのことばの無力さを十分に自覚しながら、スユランは、奔流、音域、刺繍音など、五感に訴えるイメージ喚起力をもつことばを駆使し、信仰の神秘を語り続ける。語り難きものを語ろうとする彼のことばは、依然として断言することへの躊躇いをみせながらも（「〜と思われます」、「私の考えでは」、パウロのことばに語り及び、それを「私のことば」として語ることで、いまを生きる私の魂の幸いを叫ぶ。「貧しさ」のなかに満ち溢れる「豊かさ」を語るパウロのことばは、スユランのことばがそこに収束していくことば

であるというより、そこに至る彼の語りを支え、導くことばであるというべきだろう。

スユランにとつてパウロのことばは、信仰の神秘を語ることを可能にする、比類なき「語る術」であつた。そうしたパウロのことばは、『経験の学知』の最奥部というべき第三部第一四章にも現れる。それは、ポルドーの人スユランが好んで用いる海のイメージのなかでも、最も美しい喩えを交えた詩的なことばとともに語りだされる。

この喩えは人から聞いたものであるが、真珠採りをするために海底まで潜つてゆく女たちのなかには、上端を海面に浮かんだコルクに結びつけた管を啜えて、海底にいながら呼吸する者たちがいるという。そういうことがあるのかどうか私は知らないが、私が言いたいことはこのことによつてよく表現されている。というのも、魂には天まで伸びた管がつながっているからであり、ジェノヴァのカタリナは神の中心にまで届く水脈があるといつていたからである。¹⁵ 信仰の状態にあつては、魂はこのように天まで伸びた管を持つている。そうして魂は知恵と愛とを呼吸し、命をつなぐの

である。魂はこの地の底にあつて真珠を採り、魂たちに語りかけ、人びとに説教をし、神のために人びととやりとりするのであるが、にもかかわらずそこには天まで伸びて神から生命と永遠の慰めを引き出す管がつながっている。そして、これこそ聖パウロが言っていることなのだ。「しかし、わたしたちの国籍は天にあり、わたしたちはそこから来られる救い主、主イエス・キリストを待ち望んでいるのです」(「フィリ」三20)¹⁷。(S. III, 14, 352-353. 傍点強調部は引用者)

末尾に参照されるパウロのことばは、魂がこの「地の底」——神の栄光が完全な私たちで顕現する来世から隔たった暗き信仰の地平、「永遠の城外区」(Q. III, 1, 139)たるこの世——にあつて、なお「知恵と愛とを呼吸し、命をつなぐこと」を可能にすることはとしてある。実に、ルーダン以後の心身の変容経験を被ったスユランにとって「息ができる」とは「語る事ができる」と不可分の事態なのだ¹⁸。

スユランのことばには、文字通り、なにもものが息吹いている。この点、スタニスラス・ブルトンの次の指摘は至

当である。「スユランの詩学は、それについて人がどのような評価を下すのであれ、たんなる文学批評の範疇には属さない。書きものとしての次元においてそれは、死活的であると同時に「スピリチュエル霊的」でもある必要性に呼応している。「エスプリ霊」が「スプル息吹」を、深い呼吸を意味することを思い出せばよい¹⁹」。スユランのことばに息吹いているのは、「聖霊聖霊」のことばでもあるだろう。次節では聖霊論に焦点を絞って考察を進めよう。

3. 聖霊というはたらき

「三つのペルソナのなかで最も甘美なる聖霊のペルソナ」(C. 149, 1336)と説明されるように、スユランが語る聖霊には、父そして子のペルソナと区別される固有の特徴が認められる。端的に言えば、スユランにおける聖霊は、匿名的・複数的・形容詞的・包括的な性質をもつ。父なる神と子なるキリストのペルソナが、それぞれ単数的で代替不能な名をもち、その意味で実名詞的な性質が認められるのに対して、スユランにおける聖霊には「名前も顔もない」。以下に確認するように、スユランにおける聖霊は、個々さ

さまざまな事象にその都度はたらきかける運動として理解される。その同一性は、神学的語彙によつて語られる教義的内実によつてではなく、「はたらきかた」そのものによつて担保される。それゆえ、「聖霊の名は群れなす無数の固有名に及ぶ」というクリスチャン・ブランの指摘は、そのままスユランの聖霊論に当てはまると思われる。⁽²⁰⁾

スユランの聖霊概念に認められる曖昧模倣とした性格は、彼が語る「愛」とイエス・キリストの個別性とのコントラストをみることによつて際立つ。後でも論及する最晩年の著『神の愛についての問い』に顕著に認められるように、スユランにおいて聖霊論は「愛」をめぐる語りと密接不可分に結びついているのだが、この愛という概念はしばしば、キリストという個別具体的な像からは独立したかたちで提起される。⁽²¹⁾

以下の引用は、「イエス・キリストとの合一」についてと題された『霊のカテキスム』第一巻第七部第八章の一節である。この章のなかでスユランは、「わたし自身をその人に現す」(「ヨハ」一四21)という聖句に極まるイエス・キリストと魂の合一を論じている。そこではたしかに、イエス・キリストというペルソナの具体性、代替不可能性が

強調されている。スユランはいう。この合一を果した魂は、すべてにおいてただイエス・キリストのみを見、味わう。「聖パウロにおいて、彼の手紙のなかで幾度となくイエスの名が繰り返されているのはそのためである」(COS I, VII, 568)。ところが、この章の最後でスユランが提起してくる「聖なる愛の純粹な観念」は、それまで彼が語っていたキリストというペルソナの明確な輪郭とは対照的に、むしろ曖昧で包括的なものである。

問い 私たちの主がそうして人間の意志のなかに入り込んでくると、イエス・キリストのほかには目指すものがなくなるといふことか。

答え 時としてこの入り込みは聖なる愛の純粹な観念のもとに生起することがある。その結果、この恵みにまで高められた魂は愛しか見ず、愛しか味わうことなく、この同じ愛のうちに没入消失するかのごとく生きる。これこそ、シエナの聖カタリナをして彼女の手の紙の末尾にイエスという愛を書かせしめたものであり、パオラの聖フランチェスコをしていつも愛の言葉を口ずさませていたものであり、アッシジの聖フランチェ

スコをして彼の讃歌のなかで、秩序も節度もなしに繰り返される愛の言葉を歌わせていたものである。彼ら彼女らの意志はかの愛に没入していたのだ。愛のこうした単純なまなざしのうちにも深く没入しているがために、自分たちに差し向けられうるどんな問いに対しても「愛」と答える以外にない、そういう魂たちが存在する。すべてにおいてただ愛のみを語る魂。あなたは何者かと聞かれれば、愛だと答え、あなたは何を探しているのかと聞かれれば、愛をと答えるという具合に。(ICS, I, VII, 569-570. 傍点強調部は引用者)

スユランの詩作品『神の愛の霊的讃歌』の校訂者ベネデッタ・パプーリの言葉を借りれば、スユランの歌の「主役にして絶対的な主題」である愛のイメージには、「キリスト教に固有であるようなものは何もない」。「純粹な観念」の相のもとに語られるこの愛は、スユランの神秘主義の核心に——一面ではたしかにキリスト中心主義的でありながら——展開する「線の定まらないシルエット」であり、「顔のない神」なのだ。²²⁾

パプーリの指摘に加えて留意したいのは、この愛の

「はたらきかた」である。シエナのカタリナ、バオラのフランチェスコ、そしてアッシジのフランチェスコという三つの固有名を貫く共通の愛のはたらきは、ことばを發出させるはたらきでもある。それは、書かせ、語らせ、そして歌わせるはたらきとして語られている。以下、スユランにおける愛ないし聖霊のはたらきかた、またそれをめぐる語りかたの特徴について、いっそう鮮明な理解を可能にしてくれるテクストを検討しよう。

『経験の学知』第三部第二章においてスユランは、悪魔憑きに陥ってまだ初期のころ、その身に被った「私たちの主の訪れとその霊のはたらき」を語っている。ここでの話の焦点は、一六三六年の聖十字架発見の祝日(五月三日)に彼が経験した「霊のはたらき」にあるのだが、スユランはそれに先立つ経験としてまず「主の訪れ」を語る。それは、ゲッセマネの園で苦悶する「私たちの主」の神秘が魂に刻み込まれ、魂を苦悩と悲しみとで満たすという経験であった。「イエス・キリスト」の名を繰り返しながらスユランが語るこの経験は、受難のキリストというスユランの神秘主義の中心にある明確な像の存在を確かめさせる。

続けて語られる五月三日当日の経験は、しかし、相当

に趣の異なる仕方です。こちらではもはや「イエス・キリスト」の名は言及されない。ここで引かれるのは、「或る詩人」——一六世紀の「詩王」ピエール・ド・ロンサール。ただしスユランはその名を明示してはいない——の詩であり、スユランはこの詩のことばによって自らの経歴を語る。長くなるが、重要な箇所であるため厭わず引用したい。

しかし、魂を占めるこれらの活動のうち最も顕著なものは、五月の聖十字架発見の祝日に起こったことだった。その日、修道女（ジャンヌ）と私がいるだけの小さな面会室で、二人のあいだにある椅子を挟み、いつものように私の椅子に腰かけているとき生じてきたそのはたらきは、他のはたらきよりもいっそう激烈なものだった。しかもその激烈さは非常な甘美さともなっていたため、私は、かつて私が或る詩人を読んだこと知ったことを忘れてままにしておくことはできなかった。当の詩人がこのことを語る様子はあまり敬虔なものではないが、詩人のことばは、その時に私のうちに起こったこと、また、いまでも日々起こっているこ

とをよく言い表わしている。この詩人は、ミュージズたちに語りかけるユピテルを召喚しているが、ユピテルが彼女たちに語るのは、彼女たちをとらえ、また、彼女たちの秘儀において想像される詩人たちをとらえて震わせる力である。かくしてユピテルは自らの力について次のように語るのである。

激烈なわが魂が／烈しくおまえたちを錯乱させるなら、／従順な心でもって／その動きの下に震えるおのけ、／そして、わが魂が／おまえたちの肉体と精神を揺り動かし、興奮させるのに耐えよ、／自らの神性にふさわしい神殿で／至上の権威を行使できるように。／魂はあらゆる力に満ちて／おまえたちをわが秘密で満たし、／おまえたちのなかでその秘密を達成するだろう、／技巧も汗も骨折りもなく。⁽²³⁾

以上の詩句は、かの事態を表現するために作られたようであり、ここで取り上げる価値は十分にあるように私には思われる。実質・内容としては非常に異なる

事柄を表しているが、方法・様態としては非常に似通っている。というのも、以上に引いた詩句は、詩的で異教的な力がなしたことを説明するために作られた

ものだが、私たちが語りたいのは、これと同じようなはたらきのなかで、聖霊がなすことだからである。これらの詩句はまた、かの詩人が語らんとする事柄の核心を衝いている。この詩人は、キリスト教徒でありながらリベルタンであるものの、これら神のはたらきを表現するのに長けている。彼は照明を受けた精神の持ち主であり、用いられるかぎり最も美しい言葉を用いて、この祈りのなかで彼自身を超出したのである。彼は詩人たちの霊^{エスプリ} || 息吹^{エスプリ}について語っているが、これは多くの点で、私たちの主の霊^{エスプリ} || 息吹^{エスプリ}〔聖霊〕が魂たちのなかになすことの表徴なのだ。(S. III, 2, 282-283. 傍点強調部は引用者)

「ミューズたちに語りかけるユピテル」を召喚して歌う詩人、「キリスト教徒でありながらリベルタンである」詩人のことを再召喚するスュラン。この引用箇所 realistically 表れ、また彼自身によって明言されているように、彼の

「経験の学知」にとって枢要な問題は、「実質・内容」ではなく「方法・様態」にあった。重要なのは「名」よりも「はたらき」なのだ。

ここに語られているのは、『霊のカテキスム』にいわれていた「愛の純粹な観念」と同じ、「顔のない神」の経験である。ここでの語りの焦点は、「詩人たちをとらえて震わせる力」、詩人たちの「肉体と精神を揺り動かし、興奮させる」力の作用に置かれている。つまりとてつもなく詩人をして「用いられるかぎり最も美しい言葉を用いて」語らしめ、歌わしめるはたらきである。これこそスュランが語ろうとする「聖霊のはたらき」であった。

4. 歌うことばの自由——「聖パウロのスタイル」

スュランにおける聖霊のはたらきは、すなわちことばを語らしめるはたらきであり、あるいは歌わしめるはたらきである。「私にはいつも同じひとつの歌しかない」という言葉を、彼は繰り返し咳いていた。²⁴ 本節では、彼の「歌うことば」の特徴を浮き彫りにすべく、いくつかのテクストを検討する。この作業を通じて、スュランのことばの大胆

さ、その自由なありかたと、そのことばを支え、触発し、あるいは共に息吹いているパウロのことばの影が、いっそう鮮明に浮かび上がってくるはずだ。

まず検討したいのは『経験の学知』第三部六章の一部である。ここでスュランは、魂が愛に溢れるとき、その魂に神が与える自由について語っている。スュランによれば、それは「およそ人間のものを超えた、甘美で可憐なることばを神に向かつて発する自由」である。「魂の奥底」からたちのぼるそのことばは、「世の人びとはそれを聞くことも理解することもできない」ことばでありながら、「愛の情熱に駆り立てられて恋人を呼ぶように」、あるいは「幼子が母親に呼びかけるように」魂が神に発する呼びかけのことばである。「子どものような甘えことば」であるゆえ、それを吐く魂は「愚かで分別を失っているようにみえる」。だが、聖ベルナルドゥスによれば、それは「魂は魂を占拠しているものをしか想わない」境地に至りついた魂が発することばである。それはまた、聖フランチェスコの「イタリア語の讃歌」、すなわち『太陽讃歌』に表れたことばのありかたである (S. III, 6. 306-307)。

ベルナルドゥスもフランチェスコも、近世キリスト教世

界では誰もが認める霊的権威であった。スュランがこれらの聖人の名を挙げるのも、自らの語らんとすることの根拠とするためだろうか。しかし、続く箇所をみればわかるように、彼にとって何より重要なのは、神に向かつてことばを発する自由が当の魂にとってどれほど圧倒的であるかを語ることであり、そのことばがいかなるものであるかを見極めることだった。

長きにわたり魂はこの状態にあつて、自らの愛の対象に語りかけるように、そして、でたらめなふるまいをする愚かな女のごとく神に語りかける。自分が何を言っているのかも何をしているのかも知らぬまま。時には、この状態にあつて私は、叫び声をあげたり、とつびな言動をみせたり、常識外れのふるまいをしたが、それは私がすっかり我を忘れてしまっていることのあるのであつて、その時私の精神は何をしているのかも、どうなつてしまふのかもわからないのだ。私は一五年以上もそのような状態にあつたし、現在もおおそれは続いている。私は神を呼ぶに「パパ」ということばしか発することができなかったが、聖バ

ウロがいつているのは、これのことだとしばしば考えた。

「私たちが私たちの内にいたならば、イエス・キリストの霊が「アッバ、父よ」と叫ぶ」（「ロマ」八15、「ガラ」四6）。これは魂にとつて超自然の道であるが、いとも味わい豊かな道であり、魂のはらわたの深みから、そのいつそう深い内奥から出立して、自らの親愛な恋人へと、あるいは父へと、あるいは花婿へと向かうように、神へと向かう。この道は魂のうちに記され、刻み込まれていて、魂がこの自由を得ることを妨げるものは何もない。魂は神の前に神の子どもとしていたのだが、この子どもは、かつて味わった恐怖のために恐れでいっぱいになってはいても、すっかり神に心奪われていて、神が与えてくれる砂糖菓子ドラジュを受けとるばかりなのだ。（S. III, 6, 307. 傍点強調調部は引用者）

ベルナルドゥスとフランチェスコ、「でたらめなふるまいをする愚かな女」は、いずれも同じことばの語り手なし体現者として並んでいる。ここでも重要なのは「名」より「はたらき」であり、つまるところは身体の語りかたそのものである。神に呼びかけることばの自由を語る、それ

自体が或る自由を体現しているともみえるスユランのことばは、パウロのことばに、おのれと同じことばのありかたを見いだす。「アッバ、父よ」。「魂のはらわたの深みから、そのいつそう深い内奥から」発出し、魂と神との愛の交わりを聞くこの叫びは、パウロのソーマ的神秘論の根源語なのだった。⁽²⁶⁾

引用したテキストについてもうひとつ、「私は一五年以上もそのような状態にあったし、現在もなおそれは続いている」という一文に注目したい。スユランの霊的道程は、たしかに、ルーダンの「悪魔憑き」事件に発して魂の闇路を彷徨った一五年間と、そこから回復して以後ポルドーに没するまでの晩年の一〇年弱のあいだで、劇的な転回を遂げた。回復後のスユランの「現在」とは、神を見、聞き、触れるという超常の体験の数々に恵まれた特権的な時が過去のものとなった現在であり、イエズス会宣教師として「しがなき人びと」の司牧に奔走しながら、彼ら彼女らと共通の、通常の信仰に生きる現在であった。⁽²⁶⁾

だが、同時に次のことを想起したい。それは、晩年のスユランは、かつての鮮明な現前の体験の一切が過ぎ去った「暗き信仰」の現在を生きながら、しかし、かつてルー

ダンで経験した現前をも凌駕し、いっそう深く豊かな実りをもたらす聖霊のはたらきを語ったということである。⁽²⁷⁾「私は一五年以上もそのような状態にあったし、現在もおそれは続いている」という彼のことは、「魂のはらわたの深みから、そのいっそう深い内奥から」迸る聖霊のはたらきをいうものと解釈できる。いまや「信仰の状態のなかにあつて感覚では捉えられないやりかた」⁽²⁸⁾で脈動するのははたらきを、彼は何より、神に向かつてことばを叫ぶ自由を与えるものとして語った。彼にとつて聖霊は、なにか新しいことばの地平を拓くものであり、パウロⅡアウグステイヌスの系譜に連なるソーマの変容をもたらすものであった。

ことばのありかたという問題についてスユランはきわめて自覚的だった。「イエス・キリストとの合一」を語ろうとする自らのことばがいかに常軌を逸している(extrane)か、彼は十分承知していた。以下、『経験の学知』第三部第一三章の冒頭部のテキストを引用する。「以上のすべてが、非常に不作法で非常に単純素朴なスタイルで書かれているということ、さらには大いなる混乱をみせているとどういふことはわかってゐる」(S. III, 13, 246)と

述べながら、スユランは、フランシスコ会聖霊派に属していた一三世紀の詩人ヤコポーネ・ダ・トーデイの『讃歌』^{ラウデ}を参照しつつ、「聖パウロのスタイル」を語る。聖霊に息吹かれて「神の子らに与えられる自由」を、スユランはやはり「アッバ、父よ！」の叫びに聞く。

このことについては、偉大な修道士でありながら謙遜によつていとも小さき者であつたフランシスコ会の福者ジャコボン(「ヤコポーネ・ダ・トーデイ」)が、自作の讃歌のなかで語つていたことが思い出される。⁽²⁹⁾その讃歌のなかで彼が表現しているのは、神がその聖霊を通して彼に与えた諸々の感情である。時に彼は、聖パウロのスタイルにしたがつて、すべてが自分のものであるとおのれの口から言わしめる稀有な偉大な霊^{エスプリ}を鼓吹されていた。それは、聖霊の崇高さと偉大さが魂に与える偉大さによつて、魂は万物を超える領土に置かれるということである。そして、このことは神の子らに与えられる自由であり、この自由によつて神の子らは、自らが真に王となる王国に置かれ、彼らにおいてイエス・キリストの言葉「だから、もし子があなた方

を自由にするなら、あなた方は本当に自由になる」(ヨハ「八36」)の正しさが確かめられもする。このことは、以前の章で私が語ったことに起因するが、彼らにはイエス・キリストがいて、イエスは彼らをして神に向かつて「アツバ、父よ」と叫ばせ、彼らにかの高みと領土とを与える。真に自由な人びとにのみ属する王の霊を鼓吹するかのうとくに。(S. III, 13, 346-347)

本節の最後に、スユラン最晩年の著『神の愛についての問い』(二六六四年)を取り上げよう。神愛論であるこのテキストは、同時に、第一巻第二章「『霊ご自身が私たちの霊に、私たちが神の子であることを証してください』(「ロマ」八16)」という聖パウロの言葉の説明」を基調とする聖霊論でもある。「スユランが書いたうち最も美しい論考」とも評されるこのテキストは、晩年の手紙と同じく、自由闊達なエクリチュールを特徴としている。³⁰⁾

まず重要なことは、このテキストでスユランが語ろうとする聖霊のことばは、「暗き信仰」の地平に生起することばだということである。すでにみたように、ここで聖霊のことばを語るスユランの「現在」は、かつておのれが被っ

た特権的な現前の体験を離れ、「地の底」を這いまわるように生きる宣教師の現在であった。聖霊のことばという賜物、すなわち「私たちが神の子であること」の証しは、信仰の闇を払拭するような鮮明な光ではなく、むしろ闇のなかに瞬く光として与えられる。

この証しは、この世の生において信仰が帰着する闇のなかで、魂が神に属しており、神のうちにあるということをつねに保証する。時には、この証しの確からしさが極まって、それについて心はなんの疑いも抱きえないということがある。あるいは、たとえそれが、あらゆる種類の疑いを取り除くまでには至らなくとも、それはなお、この世の生に適った聖霊のことばであることに変わりはない。(Q. I, 2, 40. 傍点強調部は引用者)

聖霊のことばとは、神の栄光から隔たった信仰の状態にあるがゆえに暗く、疑いからも自由でなく、弱さや悲惨さに塗れてもいる「この世の生」にありながら、なお人間を神に結びつけることばである。本稿2-12で引用した一六六二年五月七日の手紙において、信仰の内に走る隠れた

善・財の流脈を語るなか、スユランが参照していたパウロのことはここにも響いている。それは、「いと高き貧しさ」のなかに満ち溢れる「豊かさ」を語ることは（「二コリ」六九—一〇）であった。

『神の愛についての問い』のクライマックスといえる第三卷第一〇章、信仰の状態にもたらされる「最後の実り」として「魂に驚くべき効果を及ぼす神的な打撃や傷など愛の激烈さのうちにあるもの」を語ろうとするスユランのことが極まるところにも、やはりパウロの同じことが響いている。均整のとれない、バロック的ともいえるべき文体にも留意しながら読みたい。

神の栄光と神の人間性とは、子なる御言において同時に生じる。かくも隔たること遠く、互いに相容れないようにみえるが、にもかかわらず同じひとつのものにおいて結びついているこれら二つの事柄の遭遇から、或る衝撃が生じる——そこから人間の心のなかに火花を散らす炎が、そして途方もない大火が発生する——それは神の心の人間の心への放出の如くであるが、人間は、取るに足らない小さな存在であるため、かくも

高きものの中で深淵に突き落とされる——それは、あまりにも力強いために魂が押しつぶされてしまう神の一撃をもたらし、魂は精根尽き果てる。そして魂は、魂を追跡しその偉大さと愛とを通じて魂を破壊し、尽す神的な存在と、低く卑しい自らの存在との不釣り合いのためにおのれを打ちのめすこの責め苦によって至福の状態にされたと感じる。これは、ひどく高く鋭い音調が低音とひとつになったときに音の響きが生じさせる妙なる調和に似ている。これこそ神の神秘のうちにみえるものであり、そこには神の善性のうちに隠されたさまざまな秘密に基づく或る釣り合いがある。慈悲と正義、平安と正義、慈悲、真理、その他同様の事どものさまざまな結びつきに基づく或る釣り合い。このことはさまざまな認識を魂に生じさせ、その接近によって魂を魅了し、魂に突如として起こる煌々たる輝きをもたらすようなさまざまな感情を心に生じさせる。ちようど火薬樽に火が燃え移ったときのように。それは激しくとてつもなく、人間の内奥に凄まじい効果をもたらすのだ！

同様に、諸徳のうちにも両極的な事どもの或る種の

調和がある。それは、極限の貧しさが超自然の善・財の満ち溢れと調和するように、いと高き真理を輝かせる。使徒パウロは、燦めくばかりのこれらの事どもを数え上げ、そこでこう語っている。「わたしたちは、悲しんでいるようであり、いつも喜んでおり、死にかかっているようであり、実は、このように生きており、人に知られていないようであり、よく知られている者であり、何も持たないようであり、すべてのものを所有しています」(「コリ」六九―一〇)。聖パウロによるこの調和のとれた^レ複数の文のまとまり^ト全体が、糸で通された真珠の連なりであり、あるいは次々と煌く雷光のようでもある。(Q. III, 10, 180-182)

一六六二年五月七日の手紙にみられた「刺繍音」と同様、ここでもスユランは音楽的イメージに訴えながら、低きものと高きもの、弱きものと強きもの、貧しさと豊かさなど、相矛盾するとみえる二つのものの「調和」を語ろうとする。ニコラウス・クザーヌスの「反対物の一致」を彷彿とさせるこの調和は、しかし、異なる二つのものをひとつに収束させ、矛盾を解消することを意味しない。あるいは、その

ような一致が可能になる神的領域を囲う「楽園の城壁」³¹⁾でもない。スユランが語ろうとしているのは、異なる二つのものの遭遇から、そのあいだに、その都度新たに生じてきては、魂の最も深きところから発されることばとともにある響きである。その「妙なる調和」は、むしろ城壁のこちら側、「永遠の城外区」に生きて語り続ける者のことばの内^ニに聞かれるのだらう。そのようなことばのスタイル、あるいはリズムを、スユランはほかならぬパウロのことばに見いだし、聞き届けたのである。

おわりに

スユランにおけることばの自由——ことばを語る自由であり、語りだされたことばの自由でもある——を最も鮮烈に伝えると思われるテキストを引用して本論の締めくくりとしたい。一六六四年八月二三日、ジャンヌに宛てて書かれたこの手紙のなかで、スユランは、おのれの心身にもたらされた「話し書く自由」から説き起こし、次いで、そうした自由なことばの実践を可能にする神の愛の「陽気さ」³²⁾を語る。彼にとつて神の愛がもたらす実践は、日々の仕事

や労働、その他「謹厳」で「立派」な活動とは区別される、なにか愉快な「遊び」の側面をもっていた。そこでは実に、花火が上がり、歌や音楽が響き、踊る身体が跳梁する。

主は、主について話し書く自由を私にもたらし、この自由に通ずるあらゆる道を開き、病によつてかくも長いあいだ阻まれていた私の諸力を回復させることで私に自然的・身体的力を与え、また、私の長上の許可を通じて精神的力を与えたので、私はこの自由を、ただ神において、神のために用いるという動機のためだけに用いたいと願っています。……ただ、あえて言えば、魂が活動しはじめることができるのは、神の愛の陽気さによるのみなのです。そして、まさにこの神の愛に由来する性向に添うべく私が書き、語り、説教することは、まったく理に適ったことですが、この神の愛は、たんにさまざまな労苦、仕事、努力を命じるのみならず、神の愛のなかに探究され、そこにおいて実践されるべきさまざま活動の激発、表出、そして霊的な優雅さをしからしむことしばしばなのです。というのも、ちょうど王たちが、数多くの従者たちをと

もなつて戦事や和平のために活動しているのみならず、さまざま遊びや狩り、音楽やその他の愉しみごとに興じていて、そのために自らの財を費やしており、そのために雇われた数多くの官吏たちがいて、それがためにまた多大な出費がなされるのと同じように、神の愛にも、和平のためであれ、戦のためであれ、謹厳な職務があり、神の友らや篤信の僕たちを引き寄せる諸々の仕事、神にふさわしい数多くの立派な活動があるのですが、しかしさらに加えて、神の愛にもまた遊びがあり、演劇があり、大いなる気晴らしがあり、素晴らしい遊歩場があり、王侯貴族の花火に相当するような神の花火があるのです。神の愛には霊に響く音楽、あるいは讃歌があるのです。神の愛には舞踏会があり、ダンスがあり、あえて言えば、それは馨しき供回りの一団を従えているのです。(C. 1542, 1560-1561)

神の愛の歌や踊りを語るスユランのことは自体がその神の愛に震えて歌い踊っているかのようだ。「歌うことばの自由」を体現する彼のテクストのうちでも白眉といえるこの箇所には、パウロの名はみえない。しかし、ここまでの検

討を経てきた私たちには、このテキストにもたしかにパウロのことが——そのスタイルとリズムが——脈打っているさまを認めることができるだろう。

スユランにとってのパウロは、根源的な権威であった。ただし、この場合の「権威」とは、それによって自己のこ とばの真正性を基礎づけるためのものではなく、自己と他者、世界の関わりかたをまったく新しくすることを可能にするものの謂いである。スユランにとってパウロのことばは、人びとと共に身体をもって生きるこの世の生（ソーマ的生）に新しい地平を拓き、そこにおいてむしろ身体をもつゆえに人間を自由にする経験を可能にする「詩人のことば」であった⁽³³⁾。このようなことばをただ参照するばかりでなく、自らのことばとして語り、生きたスユランは、靈性の脱ソーマ化が決定的に進行していったともみえる時代⁽³⁴⁾にあったなされた「根源への逸脱」の、類稀なる証言者だったといえるのではないだろうか。

スユラン文献略号

C. 『書簡集』（C.L.手紙番号、頁）

Correspondance, éd. Michel de Certeau, Paris, Desclée de

Brouwer, 1966.

ICS. 『靈のカテキスム』第一卷（ICS.部、章、頁）

Catechisme spirituel contenant les principaux moyens d'arriver à

la perfection, composé par I. D. S. P., tome 1, Paris, Claude

Cramoisy, 1661.

Q. 『神の愛についての問』（Q.部、章、頁）

Questions sur l'amour de Dieu, éd. Henri Laux, Paris, Desclée de

Brouwer, 2008.

S. 『経験の学知』（S.部、章、頁）

La science expérimentale, in *Écrits autobiographiques*, éd. Adrien

Paschoud, Grenoble, Jérôme Millon, 2016.

付記 本稿はJSPS科研費JP21K12847の助成を受けたものである。

（東京大学大学院人文社会系研究科准教授）

註

- (1) Jean-Joseph Surin, *Cantiques spirituels de l'amour divin*, éd. Benedetta Pappasogli, Florence, Leo S. Olschki, 1996, p. 47. 「愛に酔える聖人たち」としてこの詩に歌われているのは、アッシジのフランチェスコ、フランシスコ・ザビエル、スタニスラス・コスカ、アビラのテレサ、ジェノヴァのカタリナ、マгдаラのマリア、そしてパウロである。
- (2) 宮本久雄『身体を張って生きた愚かしいパウロ』新世社、二〇〇九年、同『パウロの神祕論——他者との相生の地平をひらく』東京大学出版会、二〇一九年を参照。
- (3) 拙稿「スュランにおけるパウロ研究序説——『パウロの神祕論』の風を受けて」『パトリステイカ』第二四・二五号合併号、二〇二二年、一五七—一六九頁。
- (4) Nicolas D. Paige, *Being Interior: Autobiography and the Contradictions of Modernity in Seventeenth-Century France*, Pennsylvania, University of Pennsylvania Press, 2001, p. 214.
- (5) 「[スュランの] エクリチュールは、彼の人生の波乱万丈にあるいはむしろ彼の身体の変遷にびたりと一致している」(Stanislas Breton, *Deux mystiques de l'excès: J.-J. Surin et Maître Eckhart*, Paris, Cerf, 1985, p. 9)。
- (6) この点においてヘイジはモンテーニュとスュランのあいだに共通性をみている。Nicolas D. Paige, *Being Interior*, p. 205.
- (7) 拙著『ジャン・ジョゼフ・スュラン——一七世紀フランス神祕主義の光世』慶應義塾大学出版会、二〇一六年、とくに第五章を参照。
- (8) セルトーによれば、権威とは、日常生活に潜みながら生きられた世界を新たに創り変えてゆく詩のことがそのように、「ものごとを不可能なものから可能なものへと変え、信じられるものにする」ものと定義される(ミシェル・ド・セルトー『文化の政治学』山田登世子訳、岩波書店、一九九〇年、二〇—二二頁)。「詩のことは」の可能性については本稿の結論部で再度論及する。
- (9) 鶴岡賀雄「神祕主義」の再定義の可能性」『世界の宗教といかに向き合うか』月本昭男先生退職記念献呈論文集第一巻、市川裕編、聖公会出版、二〇一四年、八四—九九頁。
- (10) Michel de Certeau, *La fabrique du mystique*, t. 1, p. 150.
- (11) Cf. *Pour un vocabulaire mystique au XVII^e siècle*, éd. François Trémoières, Torino, Nino Aragno, 2004; Sophie Houdard, *Les Invasions mystiques. Spiritualités, hétérodoxies et censures au début de l'époque moderne*, Paris, Les Belles Lettres, 2008.
- (12) 拙著『ジャン・ジョゼフ・スュラン』第五章を参照。

- (13) Santa Teresa de Jesús, *Libro de la Vida*, XXV, 17, in *Obras completas*, 5ª edición, Editorial de Espiritualidad, 2000, p. 162. 邦訳は『イエススの聖テレジア自叙伝』東京女子カレッジ会訳、サンパウロ、一九六〇年、三〇四頁。
- (14) Michel de Certeau, *La fable mystique : XVII^e-XVIII^e siècle*, t. 1, Paris, Gallimard, Tel, 2003 (1982), p. 155.
- (15) Catherine de Gènes, *La vie et les œuvres spirituelles de sainte Catherine d'Adorcy de Genes*, 1627, ch. 17, pp. 122-123.
- (16) スユランのエクリチュールに類出する逆接詞は、先行する否定的な言述が、むしろかえって後続する肯定的言述を根源的な肯定（超越的肯定）へと導くようはたらいっている。拙著『ジャン＝ジョゼフ・スユラン』、三六四頁以下を参照。
- (17) 宮本によれば、「フィリ」三二―二一はパウロ神秘論の基礎テキストである。『パウロの神秘論』三八〇頁以下を参照。
- (18) 拙稿「スユランにおけるパウロ研究序説」、一六六―一六七頁を参照。
- (19) Stanislas Breton, *Deux mystiques de l'exces*, p. 24.
- (20) Christian Bégin, *Le corps pensant. Essais sur la méditation chrétienne*, Paris, Seuil, 2012, p. 93.
- (21) Benedetta Pappasogli, « Les cantiques spirituels de Jean-Joseph Surin », in *Littératures classiques*, n° 39, printemps 2000, p. 326.
- (22) *Ibid.*, pp. 326-327.
- (23) 「ミシェル・ド・ロピタルへのオード」（一五五二年）第一四節三五―四六行。邦訳は、『ロンサール詩集』高田勇訳、青土社、一九八五年、四四頁による。
- (24) 拙著『ジャン＝ジョゼフ・スユラン』、六一頁、三九九頁を参照。
- (25) 宮本久雄『身体を張って生きた愚かしいパウロ』、八四頁以下。
- (26) 拙著『ジャン＝ジョゼフ・スユラン』、三〇七頁以下を参照。拙稿「スユランにおけるパウロ研究序説」、一六一―一六四頁でもこの点を確認した。
- (27) 晩年のスユランは、通常の信仰の地平、日常の生のうちに、しかし「超常の」体験によってもたらされる以上の充溢をもたらす聖霊のはたらきを語った。たとえば、一六六三年五月三日から一二日のあいだ（この年の聖霊降臨祭は五月一三日）に執筆されたジャンヌへの手紙を参照。C. 1500, 1455.
- (28) 前註に挙げた手紙のなかの一節。
- (29) 九〇余篇が伝えられるヤコポーネ・ダ・トーデイの『讃歌』のうち、具体的にどの作品を指すのかは不明だが、「愛ゆえの貧しきよ」である可能性は高い。須賀敦子訳『中世思想原典集成12 フランシスコ会学派』平凡社、

二〇〇一年、七九八—八〇二頁を参照。

- (30) Michel de Certeau, « Les œuvres de Jean-Joseph Surin, histoire des textes II », *Revue d'Ascétique et de Mystique*, t.41, 1965, p. 78. Cf. Stanislas Breton, *Deux mystiques de l'exil*, pp. 37-38.

- (31) ニコラウス・クザーヌス「神を観ることにについて」八巻和彦訳、岩波文庫、二〇〇一年、五七頁。「反対物の一致」をめぐるクザーヌスとスユランの相違については、Michel de Certeau, « Histoire et mystique » in *Le lieu de l'autre. Histoire religieuse et mystique*, Paris, Gallimard-Seuil, 2005, p. 51.

- (32) ここには、神秘家と呼びうる者たちの歩みにはつねに伴っている鶴岡が指摘するところの、「ある種の突き抜けた朗らかさのようなもの」が認められよう。鶴岡賀雄「神秘主義の系譜と可能性」『福音と世界』第七五巻一号、二〇一〇年一月号、一一頁を参照。

- (33) 「詩人のことは、おそろく、生きられた世界を変えてゆくのにちがいない。そこで日々が創造されるのだ。自分のなかでこうした権威がきり開いてくれる経験を味わったことのない人間がいるだろうか？」(ミシエル・ド・セルトー『文化の政治学』、二二頁。傍点部は原文通り)。セルトーは、キリスト教会のそれはじめ伝統的権威が「信じるもの」でなくなる現代社会にあつてなお「尊重す

るに足る権威」を探究するなか、日常に潜む「詩のことは」に、生きられた世界に新たな地平を拓く権威の別様の可能性を見いだした。

- (34) 一七世紀末に神秘主義に引導を渡すことになるボスエは、一六九七年の論考『祈りの諸状態についての教書(第一論考)』のなかで、「霊ご自身が、言葉に表せない呻きを通して、わたしたちのために執りなしてくださるのです」(『ロマ』八26)というパウロのことはを引きついで、「新奇なる神秘家ごも」がこれを濫用していると断じている(Bossuet, *Instruction sur les états d'oraison. Premier traité, où sont exposés les erreurs des faux mystiques de nos jours*, in *Œuvres complètes*, t. 18, éd. F. Lachat, Paris, Vives, 1864, p. 435)。ボスエの論難、すなわち「身体のことば」あるいは「霊のことは」への端的な無理解は、一八世紀以降盛んに刊行された諸辞事典の「神秘家(mystique, mystics)」項目に繰り返し掲載され、拡散していった。かくしてそれは近代の神秘主義理解を少なからず規定することにもなつたと考えられる。